

Child 子どもを守る Saving

③ 諏訪清二さんと
池田啓子さん、
小島誠さんとの座談会



池田啓子
(いけだ・けいこ)

1978年から兵庫県内の公立小学校教諭として勤める。兵庫の震災・復興支援チーム(EARTH)の元メンバー。2003年、兵庫県教職員組合執行委員に就任、現在は日本教職員組合中央執行委員、女性部長。

—被災の経験から、学校や教職員、保護者、さらには子どもたち自身ができることは?

池田 震災で失ったものは大きかったけれど、復興に向けて教育現場もこれを機に変わらなければならぬと感じています。

今回の震災で、これから社会のキーワードは「つながる、支え合う」だと改めて強く感じました。でも、緊急時につながり合う、支え合うには日々の付き合いが大事です。ふだんの教育活動の中で、子どもたちがもつと地域のことについて学ぶ機会を持つようになります。地域の方々に学校行事に積極的に参加してもらうなど、子どもが自然に地域の中に溶け込めるような仕組みやネットワークをつくることが大事だと思います。

諏訪 兵庫県では、震災を機に、命の大切さや思いやり、助け合いの体験を伝える「震災から学ぶ教育」というものが生まれ、地域ではそれなりの効果を上げています。でも、当たり前のことをですが、災害は先進的なとりくみをしている地域や学校を選んで起きるわけではなく、備えの有無に関わらず、被害を与えます。だからこそ、防災は全国民が学ぶべき課題だと思うのです。小中学校で必修科目として防災教育の時間を採り入れる、などの思い切った施策も必要だと思います。

支援活動にしても、気持ちはあるても、どう行動に移せばいいかが分からぬという人がとても多い。ちょっとしたノウハウや情報を教えるだけで、日本中がもっと動きります。



子どもたちの目線で 防災教育や復興を

「子どもを守る」シリーズ③

「子どもを守る」シリーズ3回目は、「これからの防災教育を考え」と題して、自らも被災経験があり、現在、防災教育の先進的な取り組みを実践されている方々にお集まりいただきました。

日本教職員組合の池田啓子さん、新潟県教職員組合の小島誠さん、兵庫県立舞子高校の諏訪清二教諭が、被災時の学校や子どもの様子、これからの防災教育を熱く語りました。

—みなさん、東日本大震災後、すぐ被災地に入られましたね。

諏訪 兵庫県立舞子高校では、被災地に入る前に、まず募金活動を行いました。震災直後の3月中旬から3週間、子どもたち自らが、学校の最寄り駅に立ちました。募金する大人たちが、「これは16年前のお返しだよ」と話しかけてくれていたのが印象的でした。

4月に入り、子どもたちと被災地の小中学校を訪ね、校舎の泥かきをしながら、被災者のお話をうかがいました。また、「心のケア」をテーマに教職員向けの講演をしたり、学生同士の交流会に参加したりしました。5月初旬から4週間は、環境防災科の学生がほぼ全員交代で宮城県東松島市に入り、生活の場での支援活動を行いました。

—一連の活動は、マスコミでも大きく取り上げられました。

諏訪 たまたま県外から入つて目立つたからだと思います。地元の高校生の中には、地震発生時から当たり前のように支援活動をしていた子どももたくさんいます。近くにいたお年寄りに制服の上着を貸すことからはじまり、避難所となつた校舎で教職員とともに、学校に届いた毛布や食料を配るなど、自分たちは飲まず食わずで、支援を続けていたのです。だから、うちの学校の子どもたちには、「自分たちがすごいことをしていると勘違いしないように」と、いつも言い聞かせていました。

小島 新潟県教組では、すぐに被災地に

報収集・ボランティア活動を行いました。中越地震・中越沖地震の時に、自らも被災者でありながら、家庭のことは奔走して精神的にも肉体的にも極限まで追い込まれた教職員をたくさん見きましたから。

また、新潟県は被災地からの転入生をたくさん迎えることが予想されましたし、県内の子どもたちの「フラッシュバック」も心配でした。ですので、トラウマやPTSDに関するハンドブックを各校に配布し、心のケアにあたる教職員を支援しました。

—同じ被災経験者ということでお話をされた子どもたちも心強かつたのですが、なぜですか?

小島 その後の報告で、本県の子どもたちが「自分も同じ経験をしたから」避難してきた子どもたちも心強かったです。

諏訪 「以前、助けてもらったから、今度は私たちの番」という温かい気持ちで受け入れていることがわかりました。

小島 その他の報告で、本県の子どもたちが「自分も同じ経験をしたから」避難してきた子どもたちも心強かったです。

防災に生かしていく

防災教育から広がる 復興の町づくり

防災教育から広がる 復興の町づくり



小島 誠
(こじま・まさと)

1991年から新潟県内公立小学校教諭として勤め、南魚沼市立塙沢小学校に在籍。2002年に新潟県教職員組合南魚沼支部書記長に就任、現在は新潟県教職員組合副執行委員長を務める。



諏訪清二
(すわ・せいじ)

1982年から兵庫県内の高校英語教諭として勤める。2000年、兵庫県立舞子高校にて環境防災科設置のための研究をスタート。02年の環境防災科が設立されると同時に、環境防災科長に就任。以後、防災教育を専門に行う。

—被災の経験から、学校や教職員、保護者、さらには子どもたち自身ができることは?

池田 震災で失ったものは大きかったけれど、復興に向けて教育現場もこれを機に変わらなければならぬと感じています。

今回の震災で、これから社会のキーワードは「つながる、支え合う」だと改めて強く感じました。でも、緊急時につながり合う、支え合うには日々の付き合いが大事です。ふだんの教育活動の中で、子どもたちがもつと地域のことについて学ぶ機会を持つようになります。地域の方々に学校行事に積極的に参加してもらうなど、子どもが自然に地域の中に溶け込めるような仕組みやネットワークをつくることが大事だと思います。

諏訪 兵庫県では、震災を機に、命の大切さや思いやり、助け合いの体験を伝える「震災から学ぶ教育」というものが生まれ、地域ではそれなりの効果を上げています。でも、当たり前のことをですが、災害は先進的なとりくみをしている地域や学校を選んで起きるわけではなく、備えの有無に関わらず、被害を与えます。だからこそ、防災は全国民が学ぶべき課題だと思うのです。小中学校で必修科目として防災教育の時間を採り入れる、などの思い切った施策も必要だと思います。

支援活動にしても、気持ちはあるても、どう行動に移せばいいかが分からぬという人がとても多い。ちょっとしたノウハウや情報を教えるだけで、日本中がもっと動きます。

諏訪 情報を集め、自分の頭で考え、判断できる人間を育てる教育が、今、求められているように思います。

小島 それにしても今回の震災では、原発事故も含めて「想定外」のことが多すぎました。「想定」自体の見直しも必要ではないかと思います。その上で、どこに危険があるのか、危険を回避するためには、どんな行動をすればいいのかを子どもたちに考えさせ、体験させようなことを、子どもの目線で考え、学習し、大人に構想を語れるようになれば、未経験のことも自分のものになつていくように思います。

諏訪 復興計画も偉い学者の先生たちが作るのではなくて、子どもたちに自分の住みたい町を想像させ、夢を語らせ、大人である専門家が総力をあげて、それをサポートするようなことができればいいですね。これらの日本を担うのは他ならぬ子どもたちなのですから。

司会・構成

「子ども応援便り」編集長

高比良美穂